



2.064
1-2
13



門 18
部 2064
史

かきしき

種 田七夜知し

網

網 網言の境

本



可笑記巻第四

ひーうぬ人のうらへ海く思ひよりうねり
あー^グ字文ととせりややぬ物と知るか人
をう我ぐせんともれぬ或ハ早^ヒ下^ゲし又とびら
うらそととく^ヒとあつしと思ひぬ^カ家^カま^カの人ま
うひわやうわ^ヒも^ヒあ^ヒく^ヒと^ヒひ^ヒの^ヒひ^ヒひ^ヒ
かり中もあ^ヒた^ヒま^ヒ賤^ヒも^ヒ災^ヒ福^ヒと^ヒえ^ヒる^ヒめ^ヒ足
さ^ヒま^ヒば^ヒ物^ヒと^ヒあ^ヒつ^ヒし^ヒと^ヒえ^ヒま^ヒの^ヒ男^ヒれ^ヒめ^ヒ又^ヒの^ヒ志^ヒ片^ヒん
あ^ヒの^ヒ人^ヒも^ヒあ^ヒつ^ヒは^ヒ是^ヒと^ヒし^ヒと^ヒく^ヒ末^ヒの^ヒ毒^ヒに^ヒお^ヒし
人の^ヒた^ヒれ^ヒと^ヒあ^ヒし^ヒせん^ヒと^ヒあ^ヒる^ヒて^ヒ天^ヒ道^ヒと^ヒか^ヒつ^ヒり

春夜秋冬をちり月八さるとわらわら秋ありひつわの月
月ありもこれ天のまじりてつう天道のひびき
しつうーぐりも賤も福とさうひびきよまわ
さまじり師匠の根せいのまじり天道なりと聖人賢
人さうとつうひびきさうまわさうめなうついで
天のうらさをわさあひ相百氏まじりしゆとこ
終ふまじりいせいなんまじりこの人と師匠なり
てふかぬまじりあづーまじりいひびきしつうーぐり
貴賤も福とさうひびきさうまわさうめなうついで
さうさう人のなまじりあひまじり中鳥獣のまじりに
なるべーそれまじりあづーて吾人ともあわらむまじり

りあうーまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
人いれ業花よわら酒淫極乱まじりあづーまじり
利あいのまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
あづーまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
いさうていさうあづーまじりあづーまじりあづーまじり
さう道物まじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
さうまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
つにまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
らりあづーまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
あづーまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり
あづーまじりあづーまじりあづーまじりあづーまじり

ひ邪^よ悪^あにありけりていさむらふらそひびきは
細^こくなくも知^しるを^も賢^{けん}者^{しや}の福^{ふく}とていひては
聖^{せい}賢^{けん}の約^{やく}は道^{どう}切^せありていひては
結^{むす}ぶやうありてはそれの福^{ふく}ありては
さうせんあはれに言^いふては
孔子^{こうし}も聖^{せい}賢^{けん}の約^{やく}は道^{どう}切^せありては
わづらひなくも知^しるを^も賢^{けん}者^{しや}の福^{ふく}とていひては
ありてはわづらひなくも知^しるを^も賢^{けん}者^{しや}の福^{ふく}とていひては
聖^{せい}賢^{けん}の約^{やく}は道^{どう}切^せありていひては
結^{むす}ぶやうありてはそれの福^{ふく}ありては
さうせんあはれに言^いふては

れいも道^{どう}とわらわひていひては
ひりてはわづらひなくも知^しるを^も賢^{けん}者^{しや}の福^{ふく}とていひては
ありてはわづらひなくも知^しるを^も賢^{けん}者^{しや}の福^{ふく}とていひては
聖^{せい}賢^{けん}の約^{やく}は道^{どう}切^せありていひては
結^{むす}ぶやうありてはそれの福^{ふく}ありては
さうせんあはれに言^いふては
孔子^{こうし}も聖^{せい}賢^{けん}の約^{やく}は道^{どう}切^せありては
わづらひなくも知^しるを^も賢^{けん}者^{しや}の福^{ふく}とていひては
ありてはわづらひなくも知^しるを^も賢^{けん}者^{しや}の福^{ふく}とていひては
聖^{せい}賢^{けん}の約^{やく}は道^{どう}切^せありていひては
結^{むす}ぶやうありてはそれの福^{ふく}ありては
さうせんあはれに言^いふては

一七

かのさしんやと
 ひらあつ人のうらわらめ初ねまろく
 伴と来りもあつあつらんわがまらりし
 あつまらば生れあつと思ふまらりし
 もとて伴とわらりし生れあつらん
 生念母ははにいつにまらりしついで
 とさるまわらりしつらあらんやま
 とつらまにまらりしあつれあつ百
 日よりとあつらあらん
 ひらうらのうら世と愚あつらん人の
 いらま文として物とまらりしあつらん

初りいふ物にありてめとらそとかなひ
 吳母者もらびひらうらあつらん
 まらりしとくま文あつらん
 ありの満奮とまらんびやうせ
 つらうそつひに風まにわらりし
 晋乃武帝へかあつれおまらりし
 わらわらびひらうらまらりし
 まらりしついであつらん
 うらうらついであつらん
 あり物あつらんまらりし
 肉の喰はまらりしあつらん

ひしうら人のうらま文にあてたるものおるを
 うら師匠とてひしうらまのうらまの字案
 まして大儀よらわやまほらひと云古格とひし
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの

ざらめのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの
 うらまのうらまのうらまのうらまのうらまの

何ぞひつめく物つびとあやまりてあめれど
 あまこのむらさきけりてあまのこころあはれ
 の色をばあはれさうらてあまの物あはれあはれ
 へ根中師道一人がわりの色をばあまのあま
 りれたるこころあまのこころあまのこころあま
 としてあまのこころあまのこころあまのこころ
 おにさうらつてあまのこころあまのこころあま
 思ひびあまのあまのこころあまのこころあま
 師道あまのあまのこころあまのこころあまの
 なるたかしくあまのこころあまのこころあま
 半の尾あまのあまのこころあまのこころあま

大里七里へ是のわりの師道よりあまのこころあ
 子のあまのあまのこころあまのこころあまの
 美寺師道よりあまのこころあまのこころあま
 うさうさうさう

ひらひらあまのこころあまのこころあまのこころ
 吾光寺よりあまのこころあまのこころあまの
 深山橋枝もたりのあまのこころあまのこころあ
 どのあまのこころあまのこころあまのこころあ
 あまのあまのこころあまのこころあまのこころ
 白くあまのあまのこころあまのこころあまの
 下陰よりあまのあまのこころあまのこころあ

く人権絶つていふはうひをかへ給さうもぬのど
くよそも又あつたさういふはうひをかへ給さうもぬのど
の吾もいふはうひをかへ給さうもぬのど
わらうはうひをかへ給さうもぬのど
まじかへせうひをかへ給さうもぬのど
てわいの心理さういふはうひをかへ給さうもぬのど
乃たまのあつたさういふはうひをかへ給さうもぬのど
ひいさういふはうひをかへ給さうもぬのど
辨一吳んさういふはうひをかへ給さうもぬのど
や男辨さういふはうひをかへ給さうもぬのど
の存らういふはうひをかへ給さうもぬのど

さういふはうひをかへ給さうもぬのど
あつたさういふはうひをかへ給さうもぬのど
版さういふはうひをかへ給さうもぬのど
がらんさういふはうひをかへ給さうもぬのど
さういふはうひをかへ給さうもぬのど
上もあつたさういふはうひをかへ給さうもぬのど
我何さういふはうひをかへ給さうもぬのど
わがあつたさういふはうひをかへ給さうもぬのど
もあつたさういふはうひをかへ給さうもぬのど
さういふはうひをかへ給さうもぬのど
さういふはうひをかへ給さうもぬのど

ありては町人射一おんぎんたうわいさしひ毛
 皆なうひひこむじつらうぐーたうの書あさ
 りのりもたのからてまゑがーわゑがーとこ
 きうたがーもあへんむらむらうりこくごも
 らうらて草履わーたぬらうもあーの
 みくとりよそれがー言へて目も方まうむや龍
 志ろらんぞあらん蛇と蛇とつる古語とけ
 らい上天とらう龍とらうめいんこもさうらるむ
 ひその勢よあうりこくごもさうらるむ
 仁徳とまのりまを極大あーていさうありい

かうらーと甲とやありたつびむそそのがんた
 して天鼓のらうごーとらうさうさうらんや母を
 是つびむそで我いらも天鼓の勢居とらうごし
 美々老驥樵木伏くらう一千里とらういん
 やわらうこの男とわらう方くらうがー我らうら
 ううわらうはやうーまもさうわらう居せり物ら
 今力わらうさうさうさうさうさうの倍氣いさ
 何とさうさうさうさうさうさうさうさうさ
 髪とゆい力もさうさうさうさうさうさうさ
 んと何の比下人識へ高人さうさうさうさうさ
 の侍らうらうさうさうさうさうさうさうさ

うらやましくもいふに
 や終あつらふ直子よつら仁者よていふの
 易よつら時の一字も待よつら思ふ邦の
 たりおづりかたもいふのよまふに用あつらん
 秋つひよさささくさ終こととわを秘蔵も
 らら一瞬の海あも吹毛の海とあつらせりたふ
 るもあふさふさびこの海は毛唐よていふや
 うらやましくもいふに
 函がらうらやましくもいふに
 出して首尾よあつらん
 さあつたあんが侍道よあつらんや又海をいふ

志にむつひとむつひと
 一人たりよささくさ終こととわを秘蔵も
 終りあつらんや又海をいふ
 うらやましくもいふに
 のよまふに用あつらん
 打やの直田よあつらん
 秋よあつらんや又海をいふ
 やらうらやましくもいふに

辱しくあさぐりて後家うらべー志くくハハ之牙
 とハハ君乃いつりてと申の之但威光もあまりよ
 きてころハわしいにとあれハ虎乃ハと牙とがいつ
 りて用よころおありとてもあまりよあぐくせむび
 ころあぐびううがそよぬくまぐりころありて
 用よころまどふ幸可本乃うの之に混くど
 ころおの物ところうのまながくとせまおころハ
 ころううがそよーてあぐびまぐりころのうけり
 ころどころハハのあぐくせまうりころうけり
 ころどゆうあぐびころの牙乃ながくあひまぐり
 ころハ物ところうとてさなとら用よいたくわがど

いうにころうがまのありためこの物にわがあうま
 られころふよそハころていんつさあをいん
 ぐらんもあてて万中一我まうになりてゆさ
 後ハハ國家被滅もどーまてに光新乃梅あ
 ころとらぬ十

ひーのろーころのせりーとつろ羨人ひの
 つころそまをらて乳乃わらりとあててま
 ひそめこれむあくころくころんハ辱さー
 ーて十乃ゆびころとのべにのららがさハたど
 ころつことあせううとくかむせハ乳乃まひも
 けあされてころハ書風の書柳とあてりて

なまびあうんけいしとりのくにきて山のぼくわ
 わのくまごころを女けうとほくくくくくく
 何う時の女むひひくくまごころに胸のつくさ
 としてきごのわいれくまごころにやうた
 飛廉斗のまどひろげあをぬむくくくすらのひ
 つらりこいつのくくくくくくくくくくく
 もくくくくくくすつがめとまごめれひひま
 て御りおくくひそくくくくかのだくくくく
 くくくくくくくくくくくくくくくくく
 をおどてぬくくくくくくくくくくくく
 せんまうくくくくくくくくくくくくく

ねぐーうわに男も女も善人のまのくく
 思ひまづく人のくくくくくくくくく
 んのうらとんうくくくくくくくく
 うくくくくくくくくくくくくく
 らびかめわぐーくくくくくくくく
 ぐくくくくくくくくくくくくく
 二人乃女わひひくくくくくくく
 くくくくくくくくくくくくく
 日中よそく接人のくくくくくくく
 たらひくわの時むくくくくくく
 けうくくくくくくくくくくくく

又もあつて毎上りの志れたるる席とのもわりの
うみかゝる時君の將の由らんとそしつてま
はりの天罰いり

むしうれ人のつるの最の時討たれりつとく
の由南無ありとて

義父の思ひまきてうらつらん頼りどもさへんありたり
咄の中やいふのゆとまあつて自れせうらつてはけ
あつらんふいふ結わされわこといきて頼りどもさへん
かどわぬゆのつてむかやらんにはまうくさやよ
いあやうい情とらうらんあつて三人の親とさひあす下
さへんよあつてあつるゆをまきさのゆいあつて

吾人の南無ありて西のゆいあつてあつて中ありは
むし三列半窪の住人山を動かして足のとち
ありけんふのひさくあつてうらつてあつてあつて
れやせう男の教をまよあひぬれむあつてあつて
くあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
川氏まよあつてあつてあつてあつてあつてあつて
男がうらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
信まよあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
らうらつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

男ありしそめのみを侍はさしそめててぐりの
 けど人よとられしうらめまろしと百貫の初めは似
 わるゝと則座よそしお坊をさく二百貫よりぬぬ
 を後ば勤めとやしてつゝお執事をささるゝめ
 己矢の志願と申す敬あめあゝは紙に西を
 ぬ若との西お遠天地隔初へさまを當代乃自
 志法軍人とやとさうにさけたくつゝたき
 はひげまろしうらめまろし眼をさかろしを西ひさう也
 呼りろし百貫実とさる賢人の浮沈意あめ
 勤めどしうが
 ひろしうらめまろしの梁とさる西は宋統と申し人あり

そこのさういふを代官一掃つら時つやうのさ
 人尻をつらりけり一不念を入りつやうにうりた
 うさまぬ又さうの里人も尻をつらりけりぐう
 さうよつらりけりつやうにさまぬさう志うり
 そこのの里人もつやうの尻のうさまぬさうとて
 暇とさうさうのさうさうにさうの里人も
 び入尻をつらりけり切てねをたらしう海お尻
 人さうとさうあさうせんともたらして持
 らく尻をつらりてさうととあつりけりさ
 そうとけりさうときさうひてさうさうひ
 とまのさうさうさう楚國の尻とあなて

かりらるるび子秋百果とらうひ案統とあらう
やまひらうらうやゆらに國郡のうらめいれん
人いふらのらぬわづらうまむぬれぬのわらひ
が封置のわらうひらあり相後に國郡のわらひ
よわらうらうら二葉とらうらうらうらうら
んま必まあらうら

ひらららのわらうらに仁徳めらうら
らるわらうららに花の半女そ苗出果のわらう
らわらうらうらうらうらうらうらわらう
らわらうらうらうらうらうらうらうら
らわらうらうらうらうらうらうらうら
らわらうらうらうらうらうらうらうら
らわらうらうらうらうらうらうらうら

式よりぞうまづ肉くうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうら
らうらうらうらうらうらうらうらうら

鼻の元とんぬらうらうらうらうら
半のかけ書とらうらうらうらうら
ぬてうらうらうらうらうらうら

ひらうらうらうらうらうらうらうら
小男と福とん侍の子とらうらうらうら
なうらうらうらうらうらうらうらうら
てらうらうらうらうらうらうらうら
どぞうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうら

ひびくつてせあるんつうくわるべし^いたさ^い移^い少^いと
 父母の肉^い身^いと^い解^いり^いあつて^いまん^いが^いう^いと^い害^いし^い師^い函^い
 いまん^いが^いう^いと^い中^いあ^いつ^いく^い肉^い身^いと^い被^い却^いと^いし^いら^いり
 ろも^いく^い海^い洲^いと^いら^いん^いの^いら^いも^いあ^いる^いべ^いし^い中^いう^いな^いら^いり
 と^いし^いも^い祇^い子^いと^いう^いり^いゆ^いて^いう^いわ^いひ^いま^いら^いと^いま^いま^いは^いれ^い親^い
 ろも^いら^いづ^いれ^いま^いら^いに^いわ^いり^いこ^いこ^いや^いに^いわ^いく^いせ^い祇^いま^いく
 と^いい^いる^い也^い衣^い物^いの^いも^い物^い敷^いに^い對^いて^いま^い子^い乃^いん^いに^いう^いら^いゆ
 ろ^いと^いし^いく^い行^い控^いせ^いれ^いど^い才^い一^いの^いる^い麻^いう^いは^いの^いよ^いな^いら^い
 才^い二^いの^い中^いし^いや^いく^い寸^い白^いの^い自^い病^いと^いり^い或^いま^い肉^い換^い
 胃^い虚^いら^いう^いさ^いい^いん^いと^いや^いに^いな^いら^い誠^いに^い今^い時^いの^い大^い男^い
 ろ^いこ^いこ^いの^い人^いの^いも^いた^いれ^いの^い大^いこ^いこ^いら^いう^いつ^いの^いや^いな^いら^いり

病^い志^いと^いな^いら^いい^いれ^いれ^いの^い親^いの^いと^いし^いの^いあ^いさ^いゆ^いな^い
 ろ^いと^いた^いれ^いれ^いん^いと^いつ^いお^いお^いし^いた^い七^いが^い大^いの^いさ^いあ^いな
 ゆ^いべ^いし^いあ^いづ^いび^い言^いあ^いの^いな^いと^いえ^いし^いひ^いて^い付^い合^いと^いし^い
 麻^い乃^い中^いか^いら^い遠^いいた^いめ^いら^いい^いと^いく^いこ^いら^いや^いの^いた^いれ^い
 童^いの^いあ^いら^いら^いに^い物^いと^いし^いと^いあ^いま^いこ^いの^いあ^いす^い
 年^いの^いあ^いま^いで^いん^いり^いお^い回^い中^いが^い合^い戦^いの^い時^いか^いそ^い人^いの^い
 み^いを^いげ^いい^いの^いう^いま^い文^いを^いわ^いく^いも^い武^い士^いな^いと^いん^いら^いり^い
 ろ^いび^いり^いゆ^いん^いと^いの^いづ^いう^いた^いづ^いく^い物^い母^いよ^いざ^いん
 と^いあ^いり^いて^いま^いら^いう^いつ^いの^い病^い志^いも^い多^いい^いあ^いり^いし^いと^いた^いさ
 人の^い物^い治^いさ^いも^いま^いと^いま^いて^いゆ^いり^いし^いも^い時^いか^いの^いま^いら^いう
 つ^いの^い病^い者^いと^いい^いれ^いし^いの^いい^い苗^い毒^いの^い利^い殺^いを^いま^いえ^いす

痛きくまのふりとりとちりあるべしこれいふ毒を
 手とりしりてし新秋よりけり仁義と志くびや
 ともれし酒造のころにおかれ礼志ありきり
 いふさちの通のともしそわねばせむべし
 ひまの昔乱我固とありし事よむひあひあひ
 ころのゆにけりして用よむべしとわづらひ
 世代よむべしとありし事よむひあひあひ
 ちのそふ文に世代の信のそふ文よむ年比ひあひ
 つとせむべしとありし事よむひあひあひ
 こちのけりしとありし事よむひあひあひ
 らるは侍秋楓女よりりし事よむひあひあひ

とさくしりてし新秋よりけり仁義と志くびや
 ともれし酒造のころにおかれ礼志ありきり
 いふさちの通のともしそわねばせむべし
 ひまの昔乱我固とありし事よむひあひあひ
 ころのゆにけりして用よむべしとわづらひ
 世代よむべしとありし事よむひあひあひ
 ちのそふ文に世代の信のそふ文よむ年比ひあひ
 つとせむべしとありし事よむひあひあひ
 こちのけりしとありし事よむひあひあひ
 らるは侍秋楓女よりりし事よむひあひあひ

ぐひさともおまをきく痛神とてうらな同切の
 四誠をくちくし痛神のこころをてまをわく
 脈のこころをいいて業をわくゆこあれを病人
 の方より痛乃中とてころちやば物ころり
 柳よびくや脈とてまをころと廣言一と
 痛神とてびいりんやまをともおまをころ
 ありころらんとも道理なるゆるの業師と
 尚をの人とてよ物ころりわめりゆりゆり
 の中がころりの口をころりて脈は浮沈運転の
 四ころりころらんころりあれくく七表八裏九及七
 種乃死脈等とてころびいりんや胃の気なともころ

中とてや根細合とてころりよちがく小がくころり
 中をころりせしきくひくま人男女老の痛の痛
 業の深深に業をころり角のころりわあつて
 ころりも全得心とてころりひたをのれつ仕合れよ
 ころりつて痛者十人の内二三人もつてゆをれ
 ころりあつてころりころりころり痛をねぬ
 ころりあつてころりてな後ころり痛者のころりさ
 のころりて廣言とてころり但又ころりやまころりて志
 ころりあひころり痛者のころりわくころりてさる
 わのころりわりやあつてころりやまて痛勝たふ

の事天道何ぞりりあらん
 ひしうろくのちう今時のく痛しあつて
 衆よあし業よりゆりあつていふ
 やうだつてんういふかどつてあつてあつて
 たうごつていふかどつてあつてあつて
 よあつていふかどつてあつてあつて
 つしうつりあつてあつてあつてあつて
 敬しうあつてあつてあつてあつて
 うがいつていふかどつてあつてあつて
 志にすのつてあつてあつてあつて
 一しうつてあつてあつてあつて

やうせつてあつてあつてあつて
 ちまづてあつてあつてあつて
 うあつてあつてあつてあつて
 なるびあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつて
 ちまづてあつてあつてあつて
 るあつてあつてあつてあつて
 がるあつてあつてあつてあつて
 て療治よあつてあつてあつて
 一あつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつて

一、梅の葉は冬に落ち、春に生ずる。梅の花は冬に咲き、春に落ちる。梅の實は夏に熟す。梅の皮は冬に剥く。梅の核は冬に取る。梅の葉は冬に落ち、春に生ずる。梅の花は冬に咲き、春に落ちる。梅の實は夏に熟す。梅の皮は冬に剥く。梅の核は冬に取る。

一、梅の葉は冬に落ち、春に生ずる。梅の花は冬に咲き、春に落ちる。梅の實は夏に熟す。梅の皮は冬に剥く。梅の核は冬に取る。梅の葉は冬に落ち、春に生ずる。梅の花は冬に咲き、春に落ちる。梅の實は夏に熟す。梅の皮は冬に剥く。梅の核は冬に取る。

浴ひてぬぐせりつゝに我けることなき事と思ひびき
 みぬわりのたもしく梅山あぐさうはありく時を
 一日にやうしく千里又合我あつ時をわくく
 甲里いどどるやうにさうもしくとわりとせし
 教方の人をもつるまじわきよはびと忠切を
 どり又時にうてつそく申ありとつどと
 ちのつれぬ人をもれを我いふつどそ忠切を
 んげまじとせし我一人子室とつらまじあつら
 こも教方の人をも千里とつらむんがわてとせし
 とそぬのりとをせし梅山あぐさうはありく時を
 抱はそ天よわくびたが君がんとて薄して別害

とたのりとしつらむに給あつとや
 むくさう人のちうにげらうの初にまがね毎
 がわくしとせぬとつらむいよしく番匠のわらわ
 らくさう抱にまがねつらむりてこそ美の物とま
 とくまじとつら徳用あれ又屏用もまがねつら
 一とせぬとつら風とまがねく抱あれさわくま
 かりやうまがねつらつらまがねつらつらつらつら
 まがねつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 むくさう人のちうに毎とまがねつらつらつら
 んくつらつらつらつらつらつらつらつらつら
 たとせぬとつらつらつらつらつらつらつらつら

くらもたが夏乃やうあつこのの思ひて暮秋といふ
 けつこうなる時をよきとぞ又権井よすといふを
 秋うづいひふあわたりかよひうくさむいなる
 西のあつまどさきいざんぢまんとして海川
 とさゆいとまゝ又たまといふらさかへはら
 うよまむつあつさきいざんぢまんとして海川
 志がわりゆふのふらばいづれおに舞あつりき
 もいありあつあつまといふらさかへはら
 けつこうなる時をよきとぞ又権井よすといふを
 秋うづいひふあわたりかよひうくさむいなる

秋うづいひふあわたりかよひうくさむいなる
 西のあつまどさきいざんぢまんとして海川
 とさゆいとまゝ又たまといふらさかへはら
 うよまむつあつさきいざんぢまんとして海川
 志がわりゆふのふらばいづれおに舞あつりき
 もいありあつあつまといふらさかへはら
 けつこうなる時をよきとぞ又権井よすといふを
 秋うづいひふあわたりかよひうくさむいなる

下関記 巻四

うのうとらんや化國の人か何とて志くすこなる
 くづきを百民志くすこなるくせいといふあてして
 天下國家もあこまりんさざやそれこそは志の
 由わやまりさわくむ毒なるゆゑ侍のあひとい
 いふれまどたぐ善人とい善人とんわりのこのの
 とどわらる者とも善悪あはるるよはんちりあ
 目利がつこすおたりまひとまにこのの
 ふあやまといはるは親のらもあもさくさあ
 らよあやもあぬ毒のなひあまばたはらあ
 りのあれどして代人のらういといてあくさ
 ざやあがめらうもあつてあつてあつてあつて

つしこみぬ理とて志くすの理とハヤぐ
 といつれハ精意の馬猫あゆのやうなうらうけの
 とく先ハ逸物であらんぐうらん餅うらぐよ
 るんとさぬくさうこの目利がてとあもさ
 由ドまんはに付てはいうんがや同類人らの目利
 があるあてくわさあまびん人の善あにわいて
 うあぬやいあもあもあもあもあもあもあ
 ねべーやいん
 ひーさうくのさうはとろうさんといふ善人の
 はんさうてままうらうらうらうらうらうらうら
 候よあは申の善人とらあ善人のこらうてハ

りてけけ佛だんあくはようまうくわくけり
こあてうらぬ

ひりうらんのうらひを代とらうまうまき
ひやうまうまきめれといふ人あつて
なりひのうまといひあつて
のらうまきとらうまき平の
おこまうりけりやけ入るうま
ち集りうらうら飛あつて
徘徊して人あつて
上下の善悪と論じらう
うらうらよめあつて
たつたよめあつて

天性この入るい通送あつたの人なるゆへ
し又らうまうまうの甲加信
まがう甲加信なるうまの
くいあ中法なる人の善悪
忠と切あつと切あつと
さんこのあつと極徳人の
苗貴と表徴なるうま
ひりうまうまといひ
いりあまうまといひ
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた
あつたあつたあつた

豫急より大軍とりよがり新田とせめりて
 守のしけきと新田の門ありてはひて軍評
 定わりけり或は沼田と博して新根川と並に
 ありて或は越後の一類とよの津強へらこころ
 山よそそよりあんなど異儀まらしくなるに義
 貞の門やていわざや次節義助志ざしく志あ
 して坪つらうりそめり侍死とらんド
 名とありんばらとものりて義とせりこころ
 那高とるぞそいふあつ城郭よこりりら
 有つとそよひあつと又越後の一族とよ
 こころそ人のこころをあれと思ふあつ

さあつとさうらもとあつた家に居りて
 こにさうらひはしと新田のまにがたさ
 と人おのらんもらわらうと甲一死せん
 命あつと諦旨とひひよわて豫急とせりて
 折死せんよ豫急の西とよとよむらわら
 義理とさうらとて剛なるを家とのこころ
 けきと南府の門皆のころと感甲一で新田と
 うらから路人のあつとさうらとさうら
 まる大軍と死ひてさうらとせめりて
 水運とひくも路の海に脇を義助のれこ
 れる侍にあらうとさうらとさうら

白ひきもたを黙のくごひとばまぬれど毛とゆり
人ものうとまらぬよんは特教まがらより
ちうくうわうく相りよりあざやくに
く齋結わりく利教をえなるよん
ふたの慧慈あつむりりごのまれたらひて
なりべーたひよのがらぬ我こそうさ
志まんは思つたらんあつんのうらめし
牛もなるべーうううぬせう

びーうう人のうう今時の人々
ううひらとわび物言とあつんの
あぶあのみやとらう内か
二月

二月づりうして退屈 控とく又一年二年とて
とらびよせぶとらう人わりのく
なり又いづりのやうありううの
して目らうぐとらうゆと
ゆらそとかなひ存とらう
なり上も上魂のんありた日
む魂もあつとらう魂もあつと
たいらうと物言とあつと
とらうとらうとらうとらうと
とらうとらうとらうとらうと
けとありあつとらうとらうと

とうく本とて一あやまらぬいしむれに字文と
 せんよふそつちくとしてだてぬやうふんぐせ
 くれごとくとりよひのふよまらぬといけ月を
 うさの月よまらぬして字文成就し字く一日に
 一字けあがゆわとも一年中よふ百字の文
 字まらぬとてつらひあやまらぬとて百字の
 文字と一日二日よまらぬといあやまらぬとい
 ひまらぬとてつらひに魂氣とつらしてあやま
 らぬ南座のまらぬとて格あやまらぬとてつら
 らぬ折らぬとてつらぬとてつらぬとてつらぬ
 異國よらんごんとつらぬとてつらぬとてつらぬ

葉草葉本生まらぬとてつらぬとてつらぬと
 ころまらぬとてつらぬとてつらぬとてつらぬ
 うらみひしとてつらぬとてつらぬとてつらぬ
 下なるまらぬとてつらぬとてつらぬとてつらぬ
 うらみひしとてつらぬとてつらぬとてつらぬ
 ちやんちやんちやんちやんちやんちやんちやんち
 法用あり日本よそ剣山とつらぬとてつらぬと
 ちんちやんちやんちやんちやんちやんちやんち
 本のちやんちやんちやんちやんちやんちやんち
 ちんちやんちやんちやんちやんちやんちやんち
 ちんちやんちやんちやんちやんちやんちやんち

童もろく知らぬ理はさかぢがけけぬ理は
 ういじさうりのな理とよいさうんであつれ
 ころもろく知らぬ理はさかぢがけけぬ理は
 てまの美のな理とさよいさうんであつれ
 さいはぢの理とさよいさうんであつれ
 のまごつとて。属とあつとのまごつとて。累代のあつれ
 とりごつとて。属とあつとのまごつとて。累代のあつれ
 け痛のあつれ。け痛のあつれ。け痛のあつれ。け痛のあつれ
 てあつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ。あつれ
 たけこののな理とさよいさうんであつれ
 さよいさうんであつれ。さよいさうんであつれ。さよいさうんであつれ。

ともあつれ。ともあつれ。ともあつれ。ともあつれ。ともあつれ。ともあつれ
 ていさうんであつれ。ていさうんであつれ。ていさうんであつれ。ていさうんであつれ。

うまうらむにむのいふの音のそとんで致し
 ぬ討死せむの音のそとんで致し
 申れらむびらむの音のそとんで致し
 むづつの中申れらむの音のそとんで致し
 とも通よりして天なむしりて運つる運つ
 さらばむびらむの音のそとんで致し
 累代のの音のそとんで致し
 の忠孝とてしるす忠孝のついでに
 ひまの音のそとんで致し
 あつての音のそとんで致し
 の音のそとんで致し

舞ひてあむるのついでに
 びらむの音のそとんで致し
 へまの音のそとんで致し
 ぬの音のそとんで致し
 うづつの中申れらむの音のそとんで致し
 むづつの中申れらむの音のそとんで致し
 とも通よりして天なむしりて運つる運つ
 さらばむびらむの音のそとんで致し
 累代のの音のそとんで致し
 の忠孝とてしるす忠孝のついでに
 ひまの音のそとんで致し
 あつての音のそとんで致し
 の音のそとんで致し

よわそくゆめく速徳まぶらび又つれづれに剛
ももまらふをわくまづりて人わひなりくにあふ
一他人は勝を剛ありとてまもまづわくく
あおまをよろこぶ才の剛ありとてまもまづわ
く一のあふまは勝あり他人はうづらひのわ
ゆまらふべし又つれづれにまもまづわくく
つんぎんよま理をわく正直なりまづ又つれづ
金銀とありつれづれにまもまづわくく
まもまづわくく礼をわくまづ

ひー鉄山神師とつれづれに
者之流年暫不留 誰能世上保長生

美人未心免衰老 官色新時須有惜

け侍のらん人うていさそむのらあまも
けり眼をつりてくく観念してまもまづわくく
あの水乃流るまもまづわくく
まもまづわくくまもまづわくく
月ころつこのまもまづわくく
て百年とたるとまもまづわくく
長寿のらまもまづわくく
まもまづわくくまもまづわくく
まもまづわくくまもまづわくく
まもまづわくくまもまづわくく
まもまづわくくまもまづわくく

まいりいれ入て顔は四海の波とわがこころにあつ
 るのちとくうり色くうりわのわくわくしつゝい
 らくもあしきしつゝわのわくわくしつゝい
 なるしつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 経にわくわくしつゝいしつゝいしつゝい
 らくもあしきしつゝいしつゝいしつゝい
 くもあしきしつゝいしつゝいしつゝい
 しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 待しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 吟しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 ういしつゝいしつゝいしつゝいしつゝい

しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 待しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 吟しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 ういしつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 待しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 吟しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 ういしつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 待しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 吟しつゝいしつゝいしつゝいしつゝい
 ういしつゝいしつゝいしつゝいしつゝい

手抄

寬文九年

小言

有恩公

安井

公

公

高

